

14th International Conference on Digital Preservation

(iPRES2017) 参加報告

参加者：南山泰之（情報・システム研究機構国立極地研究所）

日時：2017年9月26日（火）

13:30～14:30 参加 Key Note 1 FAIR Data in Trustworthy Data Repositories

14:40～16:40 参加 Asian Session

16:50～17:30 発表 Posters/Demos lightning talk

2017年9月27日（水）

8:50～10:20 参加 Data Management

場所：京都大学国際科学イノベーション棟（吉田キャンパス本部構内）

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

会議のページ：

<https://ipres2017.jp/>

1. 概要

2017年9月25日（月）～29日（金）の日程で、デジタルデータの保存に関する国際会議（iPRES2017）が京都大学にて開催された。2017年度のJPCOAR研究データタスクフォース（以下「TF」という。）の活動テーマである、データレスキュープロジェクトにも深く関わるテーマであるため、研究データTFの南山作業部会員（情報・システム研究機構国立極地研究所）が9月26日～27日の日程で参加し、情報収集及びポスター発表を行った。以下では、参加した各セッションの詳細を報告する。

2. 各セッションの詳細

1) 2017年9月26日（火）13:30～14:30 Key Note 1

Speaker: Ingrid Dillo (DANS : Data Archiving and Networked Services, Netherlands)

Title: FAIR Data in Trustworthy Data Repositories

<https://ipres2017.jp/wp-content/uploads/Keynote-ingrid-edited-by-Nakayama.pdf>

本講演では、FAIRデータ原則とデータリポジトリの認証要件の関係性について紹介があった。以下、要旨を述べる。

FAIR データ原則 (FAIR principles : Findable, Accessible, Interoperable and Reusable) は、研究データの再利用を促進するためのガイドラインとなることを目指し、出版社、図書館、大学等が参加するコミュニティである FORCE11 での議論によってまとめられたものである。FORCE11 ではこの原則に基づき、後述のようなデータに求められる標準的な要件、手続き、認証母体の検討を行っている。

並行して、2016 年 11 月には Data Seal of Approval と World Data System によって「信頼できるデータリポジトリを認定するための中核的な統一要件」(Core Trustworthy Data Repositories Requirements) がまとめられ、2017 年 9 月にはこの基準に沿った認証母体として CoreTrustSeal (<https://www.coretrustseal.org/>) が立ち上がった。データリポジトリの認証によって①関係者からの信頼、②認知度の向上、③(データを通じた) 学術コミュニケーションの改善、④透明性の確保、⑤リポジトリの差別化、といった様々なメリットが得られ、WDS regular member はこの基準が参加及び継続に必須とされている。また、DSA に認証されたリポジトリの実態報告もなされている (Survey on DSA-certified digital repositories (report)) .

さて、データの品質評価 (FAIR データ原則に沿い、利用に適しているか) を判断する際には、ライセンスの有無や長期保存など様々な要素が挙げられる。DANS では、データが FAIR データ原則にどの程度沿っているかどうかを評価するために、Findable、Accessible、Interoperable の各々に 5 段階の評価項目を設け (FAIR badges scheme)、Reusable を測る (F+A+I=R) ツールのプロトタイプを検証している。この評価基準が、データリポジトリの評価基準に近づいてきていることは興味深い、というコメントがあった。

2) 2017 年 9 月 26 日 (火) 14:40~16:40 Asian Session

Invited Speakers: Shuji Kamitsuna (National Diet Library, Japan), Sophy Shu-Jiun CHEN (Academia Sinica, Taiwan), Lee Kee Siang (National Library Board, Singapore), Wararak Pattanakiatpong (Chiang Mai University, Thailand), Chito Angeles (University of the Philippines Diliman, Philippines)

本セッションでは、東アジアおよび東南アジアにおけるデジタル保存に関する最新情報を共有し、地域的なデジタル保存に関する問題を議論することを目的としている。日本も含め 5 カ国から、各国における取り組みの紹介があった。

① Shuji Kamitsuna (National Diet Library, Japan)

日本からは、国立国会図書館インターネット資料収集保存事業 (WARP) に関する報告があった。WARP の収集対象や状況、利活用のケーススタディが紹介された。

② Sophy Shu-Jiun CHEN (Academia Sinica, Taiwan)

台湾からは、Digital library Initiatives in Taiwan に関する報告があった。台湾のデジタルアーカイブ構築状況（100以上の参加館、5500万件以上のデジタル化資料、750件以上のウェブサイトとデータベース）のほか、台湾におけるウェブアーカイブプロジェクトや利活用を意識した資料保存の取り組み（エミュレーション、マイグレーション）などが紹介された。

③ Lee Kee Siang (National Library Board Singapore)

シンガポールからは、National Library Board (NLB) におけるデジタル保存事業に関する報告があった。2012年に National Library と National Archives を合併してできた NLBのもと、ウェブサイトからシンガポールに関する電子資料を網羅的に収集・提供しているとのことである。

④ Wararak Pattanakiatpong (Chiang Mai University, Thailand)

タイからは、チェンマイ大学におけるデジタルアーカイブの取り組みに関する報告があった。タイの歴史的文書、貴重書等のデータを同大学のリポジトリに保存、提供する取り組みを進めているとのことである。

⑤ Chito Angeles (University of the Philippines Diliman, Philippines)

フィリピンからは、フィリピンにおけるデジタル保存事業に関する報告があった。フィリピンの歴史的遺産及び各国立大学の記録を長期的に保存、アクセス保証するため、2005年頃から各大学が協働してデジタルアーカイブ構築事業を進めているとのことである。

(ディスカッションの様子)



3) 2017年9月26日(火) 16:40~17:30 Posters/Demos Lightning talk

<https://ipres2017.jp/papers/>

ポスターセッションに先立ち、各発表者からのライトニングトークタイム(45秒)が設けられ、報告者も発表を行った。続くポスター発表では、共同発表者である天野絵里子氏(京都大学、JPCOAR研究データTF)とともに研究データTFの活動紹介を行った。参加者からは a) JPCOARスキーマの詳細、b) 日本の大学図書館が取り組むデジタルアーカイブの実例、c) データ移行手続きの実際、などにつき質問やコメントが寄せられ、今後の活動に資する有意義な議論を交わすことができた。

ポスタータイトル : Reviving past research data by utilizing Institutional Repositories

URL : <http://id.nii.ac.jp/1458/00000028/>



4) 2017年9月27日(水) 8:50~10:20 Data Management

本セッションでは、Data Management に関する4本の Short Paper の発表があった。各発表の abstract についてはウェブで公開されているため、ここでは研究データ TF の活動に特に関わりが深いと思われる2つを紹介したい。

① Claudia Engelhardt, Harry Enke, Jochen Klar, Jens Ludwig and Heike Neuroth. Research Data Management Organiser. A tool to support the planning, implementation and organisation of research data management

本報告では、ドイツで開発中の研究データ管理ツール”Research Data Management Organizer”が紹介された。発表者によれば、本システムはドイツ研究振興会 (DFG : Deutsche Forschungsgemeinschaft) の助成により開発が進められており、研究データ管理の様々な側面を捉えつつ、利害関係者を繋ぐよう設計されている。また、設計に当たっては、研究分野ごとにハイレベルでの打ち合わせで各々の要求をまとめ、図書館情報学の知見により要求を標準化しつつ、ワークショップや情報交換を行った、とのことである。

本システムではデータ管理計画を構造的に捉え、プロジェクト、タスク、データセットを構造化した情報が一覧できるようになっており、各大学での実装を見据え、コンテンツはカスタマイズ可能となっている。現在は開発の第2期に差し掛かっており、関係者からのフィードバックを反映させていき、多言語対応も予定しているとのことである。以下のページから現バージョンのデモが見られるので、ご参照いただきたい。

(デモページ) <https://rdmo.aip.de>

② David Wilcox. Always on the Move: Transient Software and Data Migrations

本報告では、DSpace 及び Fedora の最新の開発状況が報告された。RDA (Research Data Alliance) の文脈に沿った開発、という指針のもと、他のリポジトリプラットフォームとの互換性確保、メタデータの RDF 化対応、データのマイグレーションソフト開発等につき紹介があった。ソフトウェアの持続的なサポートとメンテナンスは大きな課題であり、開発者のみに委ねられるべきではなくコミュニティで支えるべき、との主張が印象的であった。

3. 所感

全5日間の開催日程のうち2日間のみ参加となったが、iPRES が初のアジア地域開催、ということで Asian Session に参加できたのは非常に有意義であった。デジタルデータの保存体制は、特にアメリカでは一部の大規模大学による活動がクローズアップされる中、ア

ジア地域では概ね国レベルで行われており、日本においても国立国会図書館が主導している。今後の国内体制の整備や、国際的な連携先を考える上で有益な情報となるだろう。

また、参加者との情報交換では、「保存すべき対象を選定すること」の難しさは各国共通の悩みであるようだ、という認識を新たにした。とはいえ、物理的な制約がないデジタルデータであっても、何らかの選定を行わずに全てを保存することは人員やコストの面から現実的に不可能であり、データの性質に応じた使い勝手や管理コストのバランス、責任所在等を考えながら、マイグレーション、エミュレーション等の手法を選択していく必要があるだろう。

なお、この文脈において、日本における博士論文の電子公開義務化は国立国会図書館と各大学・研究機関が機能的に連動した取り組みであり、改めて大きな意義を見出すことができた。今後この取り組みをより戦略的に発展させる上では、様々な規模のアーカイブを担う関係者との対話を繰り返しつつ、国レベルでの電子データ連携・保存体制図を描くことが出来ると望ましいように思われる。JPCOAR としては、引き続き国内外の動向を注視しつつ、連携・保存の枠組みにおいて機関リポジトリが果たすべき役割を見出していくことが求められるだろう。

4. 謝辞

ポスター発表に当たっては、JPCOAR メタデータ普及 TF から JPCOAR スキーマに関する最新情報をご提供いただいた。また、本プロジェクトの実践例として、琉球大学附属図書館から情報をご提供いただいた。ここに記して謝意を示す。

以上